

東北唯一の闘牛 闘いに挑み続け つないだ40年

令和4年度で観光闘牛として40年を迎えた平庭闘牛は、東北唯一の闘牛で平庭高原を会場に、5月のわかば場所、6月のつつじ場所、8月のしらかば場所、10月のもみじ場所と、年4回開催しています。

平庭闘牛の始まりは、文献では明らかにされていませんが、昭和58年に本格的に観光行事として取り組まれてきました。闘牛不足やコロナなど数々の危機を乗り越え、現

在まで引き継がれています。

山間部の多い久慈地域では古くから馬よりも、四肢が丈夫な南部牛が、農耕用や荷物を運ぶために飼育されてきました。南部牛は粗食に耐え、気温の変化に強かったことから、特にも荷役牛として最適だったと言われています。

沿岸部で炊かれた塩を、盛岡方面へ運搬する塩の道を通ったのもこの牛たちです。牛を使って物を運ぶこと

を仕事とする牛方は、6頭から7頭の牛を使い物資の運搬を行いました。

牛は本来、群れで生活する動物で、強い牛に従う習性があります。先頭に立つ強い牛はワガサと呼ばれ、牛方は強いワガサをコントロールすることで、仕事をスムーズに進めることができました。

重要なポジションであるワガサを決めるために牛の角突きをしたことが、闘牛の始まりと言われています。



明治以降になると、輸入されたアメリカ原産のショートホーン種と交配品種改良が図られ、現在の日本短角種が生まれます。現

在では、全国でも有数の日本短角種の産地となり、平庭闘牛大会で活躍した牛は、南部牛の名で全国で活躍しています。



熱戦が繰り広げられたもみじ場所

平庭闘牛の特徴は、2歳の若い牛から取り組み、勝敗をつけないことです。負傷を防ぐことや負け癖がつかないように、両者頭を合わせた状態で勢子が絶妙なタイミングで引き離し、引き分けにします。両牛は会場から送られる拍手で気持ち



今場所で引退する闘脇「白鵬」の土俵入り

ちを良くし、次の大会でも戦うことができます。保存・伝承など闘牛文化を受け継ぐ全国の市町が一堂に会する、全国闘牛サミットに当市も参加。新潟県長岡市、小千谷市、島根県隠岐の島町、愛媛県宇和島市、鹿児島県徳之島町、天城町、伊仙町、沖縄県うるま市、の9市町が意見交換や交流を深めながら、持ち回りで全国大会を開催しています。



南部角突き甚句を披露する内坪博人さん

第25回大会が10月23日に愛媛県宇和島市で開催され、関係者約80人が意見を交わしました。いわて平庭高原闘牛会の八重櫻友夫会長は「全国闘牛サミットに参加し、人と人のつながりの大切さを感じた。平庭闘牛も生産者やオーナー、勢子やこれまで関わってきた人のおかげで40年を迎えることができました。闘牛の魅力をもっとたくさんの人に知ってもらいたい」と熱く語りました。

平庭闘牛大会は、動画配信サイトでライブ中継を行います。闘牛の魅力を発信していきます。コロナ禍でもさまざまな工夫を重ね、新しい取り組みを進めています。

平庭闘牛大会

勢子が牛の解説や全国の闘牛の情報などを交え、軽快トークで会場を沸かせます。

わかば場所

平成27年から一般開放しているわかば場所は2～3歳の若牛が会場や人に慣れるための練習大会で、無料開放しています。あどけない表情を見せる牛や小さいながらも闘争心むき出しの取り組みなどが楽しめます。

つつじ場所

4場所の中で最も歴史が古く、第1回は昭和59年6月10日の平庭高原つつじ祭りに合わせて、行われました。当時は、スキー場に特設会場が設けられ開催。闘牛の歴史を語る上でも欠かせない重要な大会となっています。

しらかば場所

平庭高原は、岩手県立自然公園に指定された、日本一の白樺美林を楽しむことができます。美しい景観を彷彿させるしらかば場所は8月に開催。平成18年から行われています。

もみじ場所

紅葉の時期の10月に開催しているもみじ場所。シーズン最後の大会を、紅葉を楽しみながら訪れる人で会場は埋め尽くされます。平成18年から行われています。

平庭闘牛を応援！

平成31年2月に市と包括的連携協力協定を締結している実践女子大学が、パッケージデザインを手掛け、商品などを販売。平庭闘牛を盛り上げています。

SNSによる情報発信も試みInstagramに「jissen.togyu」のアカウントも開設し、闘牛をPRしています。